



地域を愛し、夢を語り、未来を拓く生徒の育成

至誠の人

Tel 988-0614, Fax 988-0627

E-mail chu-shisei@manabi.city.fukuyama.hiroshima.jp

至誠中だより

2022年

令和4年12月6日

No.13

戦争について、平和について考えよう

昨年も書きましたが、12月8日はどんな日か憶えていますか。日本が日中戦争と言う大戦争を行いながら、さらに1941年（昭和16年）12月8日午前3時19分、アメリカ等との間で太平洋戦争という大戦争を始めた日です。そして、1945年8月15日に、日中戦争から太平洋戦争までの間に約310万人の方が犠牲となり戦争は終わりました。戦争中、我々が生活しているこの福山でも空襲があり、多くの方が犠牲となりました。その戦争体験を風化させてはならないということで、戦争体験者からの聞き取りが行われています。次の文はその中の一部を抜粋したものです。

今は小学校の前の方へ転居しているんですが、当時の家は、文字通り猛火の真ただ中でした。私の家には、親父とおふくろと妹がおりました。妹は小学校の児童だったんですが、空襲を私は覚悟しておりましたので、夕方になると自転車で芦田川の向う側（明王院のところ）の親せきの家へ妹を連れて行っていました。だから、そちらは安心だったんです。私の親父は民間人ですが、空襲警報が出ると、警察へ詰めなければならないことになっていたようです。警官ではないんですよ。臨時に応援に行くんですね。だから早速出て行きまして、家には私と母親がいました。もう火の手がどんどん広がりました。日本でも爆撃は2種類ありますね。爆弾が落ちる都市と福山市のように爆弾は一発も落ちないで、全部焼夷弾。焼けるのはこちらの方が大きい火が出ています。爆弾の方は、巨大な爆弾ですから爆風によっていっぺんに命を落とします。福山の場合はほとんどが焼死です。直撃弾に当たられた方もあったと思います。たくさん落ちましたから。私も母親を連れて逃げたんですが、目の前で6角形のこれぐらい（手を広げて、約35センチの長さを示す）のが、屋根や地面に落ちるとそのショックで破裂して火が出るんです。だから芦田川に落ちたのは、砂へ突っ立ったままで発火していないんです。これが戦後子どもが芦田川で遊ぶ時に、大変危険なものでした。早く撤去はされました。（中略）

ほとんど腰が抜けかかった母親を引っ張って出るときに、押入れから布団を出して、防火のために家の前に水を溜めていた防火水槽に浸けて、母親に頭から被らせ、私も被って逃げました。もう道路は両側が燃えて危なくて通れません。前の家を通って道三川に入り、川を渡るのを躊躇していた母親を引っ張って向う側に渡り、道路もよその家も関係なく燃えていない所を選びながら、やっとの思いで芦田川へ逃げました。そして、芦田川を渡って向う側の土手に着きました。そちらには親戚があるものですから。それに妹はそこに行っていたのでね。親戚に避難して振り返ったときに、（まったくの偶然ですが）市内は猛火に包まれて大変な状況でしたが、福山城の天守閣が完全に燃えていまして（伏見櫓は燃えなかったようですが）、東側ヘドッと崩れ落ちたのを見て、ああ福山ももうこれでおしまいだなと、それよりももう戦争は駄目だなと、つまり敗戦を痛感しました。間もなく終戦になったんですが、日本中があちこちやられました。福山が確か最後から2番目の町だったと思います。福山も41連隊という軍隊がありましたので、狙われる可能性は多分にあったんです。それから三菱電機が軍需工場でしたから、福山も必ず狙われるなと思っていました。いよいよ最後の最後にまわされて、ついでに焼けずに済めばよかったんですが、福山が8月8日でしたか、終戦の1週間前にやられたんです。たくさんの方が逃げていましたが、あの焼夷弾というのは直撃も可能性があります。数をたくさん落とすから。家に落ちると屋根に当たりますね。落ちるときはシューっという音で落ちるんですが、屋根やコンクリートの道路に当たるとカーンという鋭い音がして、それで爆発するわけです。そして火を吹くんです。それで家に燃え移るんですね。中には直撃弾が偶然当たられた方もあったと思います。死者は354名と言われますが、そのうち、子どもさんが何人いたかというのは、分からないそうです。一番の被害者は子どもと女性だと思います。（「福山が燃えた日」リレートーク 木村 滋さんの証言から）

戦争の一番の被害者は子どもと女性という言葉。現代にも当てはまります。